

パウロ―止められない男

(ピリピ・一二―二二)

「ある人」のファンになって四年が過ぎた。一五七センチの身体から繰り出される自在のパス。PKでは相手GKの動き出しを待てるしたたかさ。そして自分たちの幸運を「相手にとってアンラッキーなゴールでした」と振り返る気高き優しき。「なでしこJAPAN」のキャプテン、宮間あや選手には本当にやられっぱなしだ。そんな彼女がインタビューで常に繰り返している言葉は「気持ちの強い方が勝つ」「彼女にとって誰も止められない」「なでしこ」の快進撃を支えているのは個の才能でも名伯楽でもないらしい。

時に「誰にも止められない」という形容詞は初代教会の宣教、またその運動の中にいたパウロの伝道を表現するのに相応しいと私は思う。パウロの宣教は順風満帆とは到底言えない、厳しいものであった。しかし彼の宣教はそういったあらゆる障壁を越え、拡大し続けた。以下、パウロの宣教を阻もうとした要素について、そして彼が如何にしてそれを越えていったかを考えてみたい。

一、牢屋は彼を止められない

十二節にある「私の身に起こった事」とは即ち十三節における「キリストのゆえに投獄されていること」なのだが、パウロはこの事が却って福音を前進させることになったと言っている。一般的にいえば、これはあり得ないことである。というのも当局がパウロを投獄したのは彼の福音宣教によってユダヤ人の中に混乱が起ることを懸念したからであり、また当時の主要な伝道者の一人であるパウロを捕えたなら、この運動は鎮静すると考えてのことであつたと考えられる。

しかしその目論見は外れた。というのもパウロはそこで置かれて自分の状況を恥じたり、苛立つたりする事をせず、獄中で福音を宣べ伝え続けたからである。同時に彼の捕縛によって、兄弟たちは却って奮起し、結果キリスト教運動はますますの広がりを見せたのである。宣教者に対する迫害が、結果として宣教の一層の拡大を引き起こしたのだ。迫害の中で初代教会信仰は練磨されたのだ。これらのことは今も変わらないキリスト教の現実である。隣国のキリスト教事情を見てもそれは明らか。だから「殉教者の血は教会の種である」という教父のことばは全くもって真実である。どんなに深い地下牢も福音の声を止めることはできないのである。

二、ねたみは彼を止められない

パウロの伝道を妨げるもう一つの要素は何と同業者との人間関係の中にあつた。「初代教会に帰れ」をスローガンにする我々にとって十五―十七節の記述はショッキングだ。というのもそこにはねたみや争いをもつて、純粋な動機ではなく、党派心をもつてキリストを宣べ伝えていた伝道者たちの姿が描かれているからである。一体どういうことだろうか。要するにパウロのことを快く思っていなかった同業者(一)がいたということである。パウロは当時一流の伝道者であつた。学識、行動力、柔軟な知性と深い見識と彼は本当に「持つている」人(一)だつた。だが彼はまたイエスの直弟子でもなく、教会の迫害者という暗い過去を持つ男でもあつた。そういうこともあつてか彼は同業者からの妬みを引き受けてしまったようだ。そしてそういう輩から見れば、今の状況は全く「ざまあみろ」であつた。だがそんな嘲りもパウロの心を動揺させることは出来ない。何故かそれはパウロの心にどんなに動機が悪くとも、それらの人々はキリストを伝えていくのだから、それはそれでいいではないかというある種の「割り切り」があつたからである。ここに彼の強さを見る。

人間はとかく相手が受け入れられないと「坊主憎けりや袈裟まで憎い」になり、

その人のすべてを否定しがちだ。しかしパウロはあくまで冷静だつた。それは彼が自らの人生の目的をキリストの名を高く挙げる事に集中していたからに他ならない。そのようにキリストにフォーカスした彼にとって人の語る毀誉褒貶などもはや如何ほどのものでもなかつたのである。

* * *

山形県天童市にある皇室御用達の家具メーカーといえば、ご存じ天童木工。柳宗理、剣持勇、坂倉準三、そしてブルーノ・マツトソン。多くのデザイナーとのコラボレーションでも有名なこの会社には「真似のできない技術」がある。それは合板を自由自在に形成する術であり、中には「折鶴」と名付けられた、一枚の板を折って椅子に仕上げたモノさえある。一つの事への集中が突破口を開くという好例であるが、この姿勢は今朝のパウロに通じるものがある。私たちはよく問題が起るとそこに集中してしまい、キリストを見失いやすい。しかしそれでは問題解決は遠くなるばかりだ。寧ろ悩みの日において、キリストを見上げて生き抜くべきである。心をキリストに向け、集中しよう。そうすれば余分なものは自然に取り去られ、単純な真理の光とその力を我がものにする事が出来るのだから。